

総合文化学科の40年(上)

河 西 秀 哉

1976年、それまで文学部にあった社会学科が改組され、総合文化学科となった(2016年は総合文化学科40年目にあたる)。学科創設の前年に書かれた「総合文化学科増設協議書」の「学科増設の事由」は次のように書かれている。少し長くなるが、学科の性格を考える上で大変重要であるので全文引用したい。

現代の大学が当面する課題はきわめて多い。そのうちでも主要なものは次の四つであると考えられる。すなわち、いわゆる大学の大衆化による学生の関心や要求の多様化に対応する問題、情報化時代と称される知識量の飛躍的増大に対応する問題、専門分野の細分化による知識の断片化・専門分野間の閉鎖的セクショナリズムを克服して学問の総合的統一性を回復するという課題、および、複雑多岐な現代の国際環境の中であってより一層の平和と福祉とを実現することを目ざして、国際理解と文化交流とをより一層推進し得るような役割を担うという課題である。

本年、創立一〇〇周年を迎える神戸女学院は米国における先進的女子リベラルアーツカレッジに範をとり、キリスト教と国際精神を教学の基盤として古くから女子の高等教育を展開してきたものであり、本学としては建学の趣旨にそってこのような当面する大学の課題に積極的にこたえ大学の一層の学的充実をはかるべく、数年前より各種委員会を学内に設けて検討を進める一方、本学文学部社会学科においても同学科のカリキュラム改編について具体的な努力を進めてきたのである。これらの努力の成果をふまえて今般、従来の本学社会学科を発展的に解消して新しい構想の下に人間

研究系、社会学系、日本文化系、西洋文化系という多元的な目標にそってカリキュラムを編成する新学科を設けることとしたものである。^①

つまり高度経済成長後、大学が大衆化するなかで学生の興味関心も多様化していたこと、情報化社会に対応する必要があったこと、学問の細分化が問題視されそれを克服することが目指されたこと、国際化が進展しつつある状況を踏まえたことなどが、総合文化学科への改組の理由に挙げられている。1960年代から、「まわりに強力な社会学部が出来ます中、女子学生には社会学科というより国際比較とか比較文化のほうがいいのでは」という声も挙がっていたという。^②時代状況や周辺大学との関係性が、総合文化学科を生んだのである。

実は当初、学内では社会学科を改組するという流れではなく、別に新しい学科を設置するという方向で話し合いが進んでいた。それはやはり1960年代より始まっており、こうした話が出始めたときは「各学科で学科増設、学科充実の問題をどのように考えるか、検討して欲しい」との話が全学で出ている。そして次第に、「教養学科新設の問題がもち出されてきた」という。^③その後新学科に関する小委員会が組織され、他大学の同様の学科に関するカリキュラム調査や現在ある社会学科などのカリキュラムを基に、新学科設置に関する討議などが続けられた。1967年度には家政学科が文学部より分離独立して家政学部が創設され、そこでは「職業教育が考えられつゝあ」ったため、これに対し「女学院のもつりべラルアーツとしての性質を考えてみたかどうか」という話が出、哲学・思想・宗教、歴史、文学(日・仏・独)を三つの柱とする教養学科が構想されるようになった。そこに社会学科が絡んでいく。なぜならば、哲学や歴史に関する科目はすでに社会学科で開設されていたからである。

1969年の社会学科教師会では4月には「文化史関係科目に代わるものとして社会関係(仮称:公法・国際関係・政経・心理)が補充されるという方向」で、5月には「新学科設立の問題は、社会学科の立場からみれば歴史関係科目がぬけるか否かに帰着する……たとえ歴史関係科目がぬけるとしても社会学科は充分これに対処し、拡充整備することができる」との決議をしていた。^④そして社会学科内では、既存の社会学・社会福祉学を充実強化する構想や社会関係(政

治・経済やメディア)などの新たなコース・科目を増設する構想が出されていく^⑤。新学科が設立されればそちらに哲学や歴史などの教員や科目が移ってしまうため、社会学科としての新たな方向性を打ち出す必要性があった。それが、学科の内容を社会科学系に特化・充実させる構想であった。

ところが、1973年ごろになると情勢が変化し始める。英文学科より日本文学の2名の教員が社会学科へ移籍することになり、また日本史関係の新任人事もあって、社会学科における日本文化系の教員が充実してきた。そうすると、社会学科を改組して強化させることで「教養学科新設」に代えようとする傾向が強くなってきたのである。1975年1月に開催された社会学科教授会では、学科の再編成について話し合いが行われた。そこでは、「新学科を創設するようなスケールのもの」を目指すことが決定される。それは、「内容面が国際性を持てるような」、対外的に「国際性を印象づけるようなアピール」が必要だとされた。国際化という時代状況のなかで、それに対応する学科へと変革する意気込みであった。それは英語圏以外の内容をも含む国際化であった。

3月に開催された教授会でも、これまでの社会学系以外を分離させて「教養学科新設」という案から、基本的には学科を二分しないという方向性へとまとまっていく。そして、その際の名称は社会学科にこだわらないと決定された。これらの話し合いのなかでは、「新計画はいわばこれまでの英文学科中心の女学院の体質を変えることに基づく」との発言も出たようである^⑥。社会学科と新しい教養学科に分離してしまつては、そうした状況を変えることができない(つまり英文学科に対抗するだけの学科たり得ない)と判断されたため、社会学科を改組して拡大強化するという方向になったのではないだろうか。そして、1976年度に総合文化学科が誕生する。学科設立にあたっては、それまでの新学科設置構想とそれまでの社会学科のカリキュラムをベースに、急ピッチで準備が進んだようである^⑦。

総合文化学科への改組に際しては、英文学科からフランス語・フランス文学の教員2名、ドイツ語・哲学の教員1名が、また一般教育からキリスト教学の教員3名が総合文化学科へ移籍することになり、教員数はそれまでの17名から

(新任1名も加えて)24名に、そして学科定員も40名増えて120名に拡大する。それによって、英文学科は英語文化圏に特化して英語・英文教育を中心に、それに対して総合文化学科は「新しい時代に合った国際理解、アジアの問題も含めた国際理解と知識・学問の総合化」を目的に掲げることとなった。^⑧

総合文化学科のカリキュラムは、人間・社会・文化の学際的研究をテーマに基礎教育科目12単位を新設、専門教育科目に人間研究系・社会学系・日本文化系・西洋文化系の4系を設けた。^⑨そして2回生までの学生は多くの分野を学び、3回生になって専攻を決定する仕組みが整えられた。

その後、1986年度には学科定員数が60名増加するなどしたが、総合文化学科は比較的安定した学科運営がなされていく。しかしそこに変化が訪れる。人間科学部構想である。1990年ごろより学内では、家政学部を人間科学部に改組しようとする動きが高まっていく。総合文化学科のなかにも自身の「プリンシプルをもう少し明確にできないかという考え方」があり、それと結びつく形で、社会学・社会福祉学・心理学が家政学部と組んだ形で新しい学部(人間科学部)にしようという構想があらわれた。^⑩周辺大学においても人間科学部が設置され、1991年には大学設置基準が改正(大綱化)されるなど、大学改革が様々なところで展開される状況にあって、神戸女学院もそれに呼応する形で動き出したと言える。そして、総合文化学科もそのなかに巻き込まれていく。

1990年7月の臨時科別教授会では、人間科学部構想について総合文化学科教員に説明がなされ、その内容について話し合いが行われた。このなかでは、そうした将来計画に合わせて総合文化学科の改編構想も議論していくことが決定される。^⑪この時期から、総合文化学科改革の話し合いが科別教授会や委員会などで数多く重ねられていく。科別教授会の議事録には、総合文化学科の「見直し」や「立て直し」といった文言が目立ち、それだけ危機感を持ってこの問題に取り組んでいたことがわかる。

そして学科のカリキュラムについても検討が加えられていくなかで登場したのが、入門講義を廃止し、入門ゼミを設ける構想である。入門講義であるのに上級学年になって履修する学生が多いこと、負担の割に成果が少ないことなど

がその理由であった。^⑫ゼミを設けることでより丁寧な指導をする意図もあったと思われる。そして入門ゼミは1992年度より設けられることとなった。

また、人間科学部構想については最終的には、1993年度に家政学部から改組するにあたって、心理学の教員2名が人間科学部に移籍することになり、教員学の教員1名が家政学部から総合文化学科へ移籍することとなった。これによって、総合文化学科内の人間研究系が実質的に弱体化するため、どのように対応するべきかも1991年ごろより話し合われた。最終的には、人間研究系と西洋文化系が合併され、西洋文化・思想系として統合されることとなった。^⑬そして1993年度より専門教育は社会研究系、日本文化系、西洋文化・思想系という3つの系に再編され、系内20単位(ゼミ教員の承認で系外8単位まで認める)と系外16単位を選択必修とするカリキュラムへと変更された。

ここに、現在の総合文化学科にも繋がる体制が構築されたのである。(続く)

註

- ① 『海図なき時代へ—総合文化学科二十五周年記念講演会報告書—』神戸女学院大学文学部総合文化学科、2002年、58ページ。
- ② 高島進子「『文化の日』に思う KC 総合文化学科の学び」前掲『海図なき時代へ』14ページ。例えば、関西学院大学社会学部設置は1960年、関西大学社会学部設置は1967年である。
- ③ 「社会学科教師会記録 昭和43(1968)年度」文学部事務室蔵。このころは教授会ではなく教師会であった。
- ④ 「社会学科教師会記録 昭和44(1969)年度」文学部事務室蔵。
- ⑤ 「社会学科教授会記録 45(1970)年度」文学部事務室蔵。
- ⑥ 「科別教授会議事録 昭和48年度(1973)49年度」文学部事務室蔵。「若い先生方の……女学院といえは英文科といった頃、それに対する反体制的といえますか反乱的な勢もあった」という(高島前掲「『文化の日』に思う KC 総合文化学科の学び」14ページ)。
- ⑦ 「1975年度1976年度学科別教授会議事ノート」文学部事務室蔵。
- ⑧ 高島前掲「『文化の日』に思う KC 総合文化学科の学び」14ページ。
- ⑨ 前掲『海図なき時代へ』59ページ。
- ⑩ 山本義和「インタビュー 人間科学部改組について」『学院史料』第22号、2008年、7～10ページ。
- ⑪ 「科別教授会議事録 1989年度～1991年度」文学部事務室蔵。
- ⑫ 「科別教授会議事録 1991年度～1992年度」文学部事務室蔵。

⑬ 「科別教授会議事録 1992年度～1993年度」文学部事務室蔵。

総合文化学科歴代学科長

年度	呼 称	教 授 名	専 門	備 考
1976	学科主任	森 野 礼 一	心理学	在職1971.4-1997.3(1994.4-1997.3人間科学科特任教授)、名誉教授
1977				
1978				
1979		池 井 望	ドイツ文学	在職1976.4-1988.3
1980				
1981				
1982				
1983		大野篤一郎	ドイツ哲学	在職1967.4-1998.3(1967.4-1976.3英文学科、1976.4総合文化学科)、名誉教授
1984				
1985				
1986				
1987	学科長	小玉佐智子	経済学	在職1956.4-1994.3、元学長、名誉教授、同窓生
1988				
1989		大野篤一郎		
1990				
1991		高 島 進 子	社会学	在職1966.4-2004.3、名誉教授
1992				
1993				
1994				
1995		三 上 勝 也	文化人類学	在職1982.4-2006.3、名誉教授
1996				
1997		清 水 忠 重	西洋史	在職1977.4-2005.9
1998				
1999				
2000				

年度	呼 称	教 授 名	専 門	備 考
2001		上 野 輝 将	日本史	在職1992.4-2009.3
2002				
2003		古 庄 高	教育学	在職1977.4-2014.3(1977.4-1993.3家政学部、1993.4家政学部教授併任、1996.4総合文化学科教授)、名誉教授
2004				
2005				
2006				
2007		小 松 秀 雄	社会学	在職1989.4-2016.3、名誉教授
2008				
2009				
2010				
2011		孟 真 理	ドイツ文学	在職1995.4-現在
2012				
2013		石 川 康 宏	経済学	在職1995.4-現在
2014				
2015				
2016				

(総合文化学科准教授)